

教会の大管長の職の継承

十二使徒との集会, 1844 年 3 月

ウィルフォード・ウッドラフ大管長 (1807 – 1898 年) は次のように語っています。



「わたしは〔ジョセフ・スミス〕が世を去る前に語った最後の話を覚えています。……ジョセフは 3 時間ほど立ち続けていました。部屋は焼き尽くす火のようなもので満たされ、彼の顔は琥珀のように澄んでいました。ジョセフは神の力に包まれていました。彼はわたしたちの義務について語りました。この神の大いなる業の全てについて語り、そしてこう言いました。『わたしは、神がかつて地の面に住む人に授けられた、命と救いの全ての鍵、全ての力、全ての原則を、頭上に結び固められています。これらの原則とこの神権と力は、天の神が地上に確立し始められたこの大いなる最後の神権時代に属するものです。』そして十二使徒に言いました。『今わたしは、主がわたしの頭上に結び固められた全ての鍵、全ての力、全ての原則を皆さんの頭上に結び固めました。』……

このように述べた後に、ジョセフは言いました。『皆さんに申し上げます。この王国の重荷は今や皆さんの肩に置かれています。皆さんは全世界において王国を担わなければなりません。そうしなければ罰の定めを受けるでしょう。』(『歴代大管長の教え—ジョセフ・スミス』532)

シドニー・リグドンの主張

大管長会第一顧問のシドニー・リグドンは、1844 年 8 月 3 日にペンシルベニア州ピッツバーグからノーブーに到着した。彼は、教会員が教会の管理者を選出することができるように、8 月 6 日火曜日に特別集会を召集した。シドニー・リグドンは、十二使徒全員がアメリカ西部の伝道から戻る前に、教会員に彼の教会の管理者としての地位を承認させるためにこの集会の召集を試みたかのように見受けられる。幸いにも、ウィラード・リチャード長老とパーリー・P・プラット長老の努力により、この集会はほとんどの十二使徒がノーブーに戻った 1844 年 8 月 8 日に延期された。

シドニー・リグドンは、以前ジョセフ・スミスの代弁者として召され、聖任されたことから(教義と聖約 100:9)、「教会が正しい方法で治められるように取り計らう」のは彼の責任であると主張した(History of the Church, 第 7 巻, 229 で引用)。

ジェームズ・ストラングの主張

ジョセフ・スミスの死後、1844 年 2 月にバプテスマを受けたジェームズ・ストラングは、ジョセフ・スミスがストラングを継承人として指名した手紙をジョセフから受け取ったと主張した。この手紙は偽造されたものであった

が、ジョセフ・スミスの署名が記されているようにも見え、ストラングがその手紙を見せたとき、それに惑わされた教会員もいた。ストラングは、彼に天使が訪れ、鍵を与えられたとも言った。

1844 年 8 月 7 日

ジョン・テラー長老、ウィラード・リチャーズ長老、パーリー・P・プラット長老、そしてジョージ・A・スミス長老は、シドニー・リグドンが到着したとき、すでにノーブーにいた。ブリガム・ヤングを含む残りの使徒のほとんどは、1844 年 8 月 6 日の夜に到着した。翌日の 8 月 7 日、使徒たちはジョン・テラーの家に集まり、会議を行った。その日の午後、十二使徒、高等評議員、および大祭司が集まった。ヤング大管長は、聖徒たちに彼の言いたいことを伝えるようシドニー・リグドンに依頼した。シドニー・リグドンは、示現を見たこと、そしてジョセフ・スミス以外の誰も教会の大管長の職を継承することができないことを大胆に宣言した。次に、彼は彼自身を人々の管理者として指名することを提案した。

シドニー・リグドンが語り終えた後、ブリガム・ヤング(1801 – 1877 年) は次のように言った。



「わたしは誰が教会を導くかについて関心はないが……一つ知っておかねばならないことがある。それはこの件についての神の御心である。わたしはこの件について神の御心を知る鍵と手段を持っている。……

ジョセフは、彼がこの世から連れ去られる前に、彼自身が持っていた神権の職に属する全ての鍵と力をわたしたちの頭に授けた。誰も、どんな団体も、この世、そして来世においてジョセフと十二使徒の間に割り込むことはできない。

ジョセフは十二使徒に対して、『わたしは礎を築いたので、あなたたちはその上に築いていかななくてはならない。王国はあなたたちの双肩に掛かっているからである』と何度語ったことか。(History of the Church, 第 7 巻, 230 で引用)

1844 年 8 月 8 日午前 10 時

1844 年 8 月 8 日、ノーブーの聖徒たちは、教会の管理者であるというシドニー・リグドンの主張を聞くため、午前 10 時に集まった。シドニー・リグドンはそこに集まった何千人もの聖徒たちに対して約 1 時間半話し、彼が教会の管理者になるべき理由を説明した。そのうちの数人が、シドニー・リグドンのスピーチは靈感のないものであったと述べている。

ブリガム・ヤング大管長は、新しい指導者を指名するためではなく、預言者を追悼するためにノーブーに戻って来たかったと手短かに話した。ヤング大管長は、指導者と教

会員の集会がその日の午後 2 時に行われることを発表した。会員の中には、ブリガム・ヤングが話したとき、彼の外見と声が変わり、預言者ジョセフ・スミスの外見と声になったと証言する者もいた。

エミリー・スミス・ホイトは、次のように振り返った。「説得の仕方、顔の表情、そして声がわたしの魂全体を震わせました。……ジョセフ・スミスが亡くなったことは知っていました。けれど、わたしはしばしばはっとしては、話しているのがジョセフではないと無意識に確かめていました。それはジョセフではなく、ブリガム・ヤングでした。」(リン・ワトキンス・ジョーガンセン, "The Mantle of the Prophet Joseph Passes to Brother Brigham: A Collective Spiritual Witness," *BYU Studies*, 第 36 巻, 4号 [1996 – 1997 年], 142 で引用)

ウィルフォード・ウッドラフは、「自分の目で彼を確かめなければ、それがジョセフ・スミスでないとなしを説得できる人はいなかったでしょう。これはこの二人との面識がある人なら誰でも証明できることです。」(*History of the Church*, 第 7 巻, 236 で引用)

1844 年 8 月 8 日午後 2 時

午後 2 時、この集会が大きな意味を持つものとなることを理解していた何千人もの聖徒たちが集まった。ブリガム・ヤングは、シドニー・リグドンの管理者としての職務の提案と、彼が過去 2 年間に渡ってジョセフ・スミスから遠ざかっていたことについて率直に話した。

「リグドン会長によって導かれることを人々が望むならば、それもよいだろう。しかし、わたしは世界全体における神の王国の鍵を持つのは十二使徒定員会であることを述べておく。

十二使徒は、神の指によって指名された。ここにブリガムあり。彼のひざがよろめいたことはあるか？彼の唇が震えたことはあるか？ここにヒーバー (C・キンボール) と残りの十二使徒あり。神権の鍵、すなわち世界の隅々まで伝えられる神の王国の鍵を持つ独立した団体である。これは紛れもない事実なのである。彼らはジョセフ・スミスの隣に立つ、教会の大管長会なのである。」(*History of the Church*, 第 7 巻, 233 で引用)

多くの聖徒たちが、その午後ブリガム・ヤングが話したとき、彼の外見と声がジョセフ・スミスにそっくりであったと話しています。この奇跡に加え、多くの聖徒たちが、ブリガム・ヤングと十二使徒定員会が教会を導くために神によって召されたと聖霊が証するのを感じました。この集会の終わりに、ノーブーの聖徒たちはブリガム・ヤングを頭とした十二使徒定員会が教会を導くことを満場一致で支持しました。しかし、教会の会員の全てが最終的に使徒に従うことを選んだわけではありませんでした。それぞれ独自の教会を設立したシドニー・リグドンとジェームズ・ストラングなどの人物に従うことを選んだ人々もいました。

